

酪農は命を育む生命産業

宮城県農業大学校
畜産学部 2年 五十嵐 友美

現在、わが国では牛乳の消費低迷が進行しています。人口減少や少子化はもちろん、食の多様化により牛乳と競合する飲料は多種多様になり、コンビニや自動販売機で安く手軽に手に入れることができるようになりました。また、以前は牛乳を朝食時に最もよく飲んでいましたが、近年では朝食を食べない人が増えており、牛乳を飲む機会はさらに減ってしまいました。そして3月11日に起きた東日本大震災が福島第一原子力発電所の事故を引き起こし、風評被害が牛乳の消費低迷に拍車をかけました。

3月11日午後2時46分、まだ肌寒く、桜のつぼみが膨らみ始めた頃でした。被害状況はニュースや新聞にある通り悲惨なものです。私の住む地域は津波の被害はありませんでしたが、震度7と最も大きな揺れを観測しました。約2週間、断水と停電が続き、スーパーやコンビニは毎日のように長い行列が出来ていました。私の家は実家が農家であることが幸いし、コメや野菜は豊富にあったので食に関してはあまり苦労することはありませんでした。農業は私たちが生きる上で欠かすことができない職業なのだと改めて実感することができました。しかし、酪農家の置かれている現状は厳しく、畜産業を目指す私は気が気ではありませんでした。

道路状況が悪く、ガソリン不足や設備の故障の影響で、毎日、定期的に回っていた集乳タンクローリーが巡回できなくなり、また乳業メーカーの製造ラインも破損し、牛乳を供給するためのサプライチェーンは寸断されてしまいました。そのため、酪農家は搾った牛乳を廃棄処分せざるをえない状況にあり、スーパーなどから一時的に牛乳が不足する事態が起きてしまいました。次に福島第一原子力発電所の事故が風評被害をもたらしました。酪農家は、セシウムが検出された牧草より前に刈り取ってあるものや買い餌を牛に食べさせたり、放牧の自粛をしたり、安全に牛乳を供給できるように対応を取っていました。しかし、その様な苦労や対応は消費者にはあまり伝わらず、「セシウム検出」、「放射能汚染」などの言葉が目立ってしまい酪農家が悪者扱いされてしまっています。私は声を大にして言いたい、「店頭に並んでいる牛乳は安全なのだ」と。

牛乳についてここまで考えさせてくれたのは、一年前の9月に行った40日間の牧場研修でした。

研修初日、夕方の作業に入ろうというとき、子牛が一頭生まれており、研修先の方に呼ばれて乾乳牛舎の方に行ってみると生まれていたのはレッドの雄でした。初日にレッドの子牛が生まれるなんて、と感激しているのも束の間、子牛はすぐに母牛から離されて子牛のたくさんいる小屋に連れていかれ、私は生まれて数分の間に親から離されてしまう子牛を見て少しだけ胸が苦しくなりました。子牛のいる小屋で、初乳を飲ませたとき、生まれたばかりだと言うのにとっても力強く哺乳器に吸いついてくる子牛に生命の強さを感じるとともに、私は哺乳を任される

ことになっていたのですが、研修中はここにいる子牛たちの親代わりとして頑張ろうと決意しました。

哺乳バケツを持って小屋に行くと、子牛たちが一斉に「べーべー」と鳴き出し、仕切られた狭い空間で走り回る子牛は可愛くて仕方がありません。1頭1頭声をかけながらバケツをフックに引っ掛けるとすごい勢いで飲み始めます。この時、ただ可愛いと眺めるだけでなくしっかり子牛の状態を観察しなければなりません。下痢をしていないか敷きワラの上と子牛のお尻を見ることは毎日欠かさず行いました。初めのうちは下痢かどうかの判断がつけられませんでした。研修半ばには見分けられるようになりました。子牛1頭1頭の性格が分かってきた頃、研修先の農家さんに「明日子牛市場に出すからね」と言われました。研修開始から約4週間目の事でした。私の研修初日に生まれたレッドを含めた3頭が迎えにきたトラックに乗せられて行きました。たどたどしい足取りの子牛たちに、せめて高い値段で売れてくれと願うばかりでした。

子牛が3頭もいなくなり、小屋は少し静かになりました。この時期に生まれた子牛は、なかなか立つことができなくて何日かかけて漸く立てる様になることが多くありました。しかし、1頭だけ一向に立つことができない子牛がいました。私は、哺乳バケツをその子牛が飲みやすい場所に置いたり、「飲んで、頑張れ」と声をかけることしかできませんでした。自分では寝返りさえ打つことができないので、足をバタバタ動かすと敷きワラも一緒に動いてむき出しになったコンクリートが子牛の皮膚を傷つけてしまいます。徐々に弱っていく子牛を見ていることしかできないのが悔しくてたまりませんでした。研修初日にこの子牛たちの親代わりとして頑張ろうと決めたのに。私は親として何もしてやることができませんでした。結局その子牛は最後まで立つことはできず、私が休暇を取っている間に安楽死させてしまいました。小屋は更に静かになりました。私が哺乳バケツを頭に近付けると必死に飲んでいたあの子牛がいた場所は空っぽです。汚れた敷きワラが数日前まであった子牛の生を証明しています。実感がわきませんでした。

この研修で学んだことはたくさんあります。生まれて数分で母牛から引き離され、一人ぼっちにされてしまう子牛。毎日あげていた鳴き声はお母さんを求めているものだったのかもしれませんが。乳牛では、ホルスタインの雌以外の子牛は市場で売られていくこと。まだまだ小さな後ろ姿はとても寂しく感じました。また、弱い子牛は淘汰されてしまうこと。あの子牛はどんな思いだったのでしょうか。生きたいのに生きられない、私以上に悔しかったかもしれません。この子牛のことは一生忘れません。それが私なりのせめてもの供養だと思います。

研修で初めて牛の乳房に触れたとき、それは想像していたよりも軟らかくてあたたかいものでした。また、搾った後の牛乳は人の体温程温かかったです。私は驚き、感動しました。そして気づきました。牛も生きているんだ、生き物なんだ、と。それが命をいただく、ということ、生命産業である畜産業に肌で触れた瞬間でした。

研修を通して様々な生命の形に触れた今だから、出荷できない牛乳を廃棄処理することの悔しさや置いてきた牛を思う辛さが分かるようになりました。今日の震災は多くの傷を残して

いきました。津波で乳牛の半分以上が死んでしまった畜産農家の方や震災のショックから乳量が低下している牛、あるいはまったく乳が出なくなってしまった牛など、人だけでなく牛も大変な傷を負っています。今、私たちに必要なものは「絆」です。半年経ち、もはや聞き慣れてしまった言葉かもしれませんが、この一文字にはたくさんの思いが詰まっていると思います。

風評被害により東北の牛乳消費低迷が進行している中、私たち消費者ができることは何か。私は、生産者の苦労や家畜動物について理解することが大事なのだと思います。牛は、自分の血液から牛乳を作り出しています。正確には乳房の中の乳腺細胞が血液から運ばれてきた様々な栄養を取り込んで牛乳を作っています。1kgの牛乳を作るのに必要な血液は500L、1日に45kgの牛乳を出す牛の場合は22.5tもの血液が使われているんです。生き物にとって血液はなくてはならないものです。体に酸素や栄養を運び、必要のない老廃物を回収してくれています。血液が足りなくなれば貧血、ひどい場合では死に至ったりもしてしまいます。その様な大切なものを私たちのために1日に大量に牛乳に変えてくれています。本当は子牛が飲むはずの乳を。そして酪農家の方は、牛がおいしい乳を出してくれるように餌や牛の飼育環境、コンディションに最善の注意を払って、1頭1頭ミルカーを使って搾乳しています。私たち消費者はそのことを理解しなければなりません。少しでも理解することができれば、「セシウム検出」や「放射能汚染」などの言葉に惑わされることなく、冷静に判断することができるはずです。私たち消費者に求められていることは、風評被害に惑わされない、それが生産者と消費者を繋ぐ「絆」なのだと思います。また、震災後、農業再建に向けて農家の方々は、瓦礫の撤去を行い、壊れてしまった搾乳機などの設備を新しくして酪農を再開し始めています。酪農を再び営むことができるようになったのは同じ酪農家の方々の協力があったからこそだと思います。そして、農協は農業再建のために基金を設立し、ミルク・サプライチェーンの安定を図るために風評被害の対策を講じ、飼料の確保に努めるなど震災から今日まで支援を行っています。生産者と消費者、生産者同士を繋ぐ役目を担っているのが農協です。被災地の酪農家の声を聞き、今求められているもの、ことを正確に把握し、支援に努めている農協も生産者と「絆」で繋がっているのだと感じました。

私は、牧場ののんびりとした雰囲気憧れ宮城県農業大学校畜産学部に入學しました。将来は牧場を経営したいと思っていましたが、それは漠然としたものでしかありませんでした。実際には、毎日の飼養管理で気をつけなければならないことはたくさんあるし、経営は思っているよりも難しい物でした。大学校や牧場研修で様々ことを体験し、「牛飼いは好きなだけでやっていけない」ことを理解した今は将来の進路について具体的に考えることができるようになりました。

私は、家畜の飼料に興味があります。給餌の仕方や餌の種類、量などが牛の体調に関ってくるということが面白いと思ったのと同時に、牛乳生産において重要性を感じたからです。そのため、卒業後は飼料会社に就職したいと考えています。牛は濃厚飼料が好み、粗飼料と一緒に

与えたとしても大好きな濃厚飼料だけを選んで食べてしまいますが、酪農は濃厚飼料よりも粗飼料が大切です。濃厚飼料が好きだからと言って与えすぎでは病気や事故になりやすいのです。胃袋を刺激し、消化しやすい環境を整えるには粗飼料が重要になってきます。粗飼料があるから牛乳を生産できるのです。しかし、今回の原発事故の影響で牧草などから暫定基準値を超えるセシウムが検出されており、震災後に刈り取った牧草の牛への給与の自粛がされ、風評被害が更に深刻になっています。こんな時だからこそ私は飼料会社に就職し、安全で安心な飼料を提供することを通じて、消費者の方々が安心して牛乳を飲んでくれるために頑張りたいです。私は、今年9月に飼料会社で研修をさせていただいた際、牧草を様々な所から調達し、酪農家の支援を行っていたということを聞きました。そして飼料会社が何のためにあるのかを学ぶことができました。飼料会社は、単に餌を販売するだけではなくてその農家にあった飼料設計を行い、経営改善にも貢献している会社でした。そうして最善の状態で生産された牛乳は消費者の食卓に届くのです。私は、飼料会社が生産者と消費者を繋ぐパイプであると思いました。また、飼料について知識を増やすと同時に、様々な酪農家の話を聞き、飼養管理や経営の技術について勉強して、行く行くは自分で牧場を経営したいと考えています。

私は、牧場を経営してやりたいことがあります。それは食育です。消費者の人々に酪農の楽しさや大切さを知ってもらうための牧場体験を行うことで食育を推進していきたいです。風評被害やさまざまな情報に惑わされるのも、すべて酪農のことを正しく知らないからです。だから搾乳や牛の飼養管理、子牛の哺乳などの体験を通して牛乳ができるまでにどんな工程を踏んでいるか知ってもらうことで、私が牧場研修で感じたように消費者の方にも体験を通して酪農の、農業の素晴らしさや命の尊さを感じてもらい、牛乳が価値のあるものだ実感してもらいたいです。本物を見て本物の味に触れることで、生産者の生産物が消費者の食卓まで繋ぐ食育をやりたいと思います。

現在、消費低迷が叫ばれている牛乳。更に風評被害が重なり、今の酪農は厳しい状況にあります。さらには震災や原発問題の中、牧場を経営したいという夢は現実性が薄いように感じられるかもしれません。これを境にしてあとは前をみて進めばいいのです。夢を大きく持って、真に消費者に望まれる生乳生産に取り組めるチャンスだと思います。風評被害、牛乳の消費低迷を食い止めるには生産者の努力と消費者の理解が必要になると思います。私は将来、生産する立場となった時おいしい牛乳を作っていくとともに、体験を通して生産者と消費者を繋ぐ懸け橋になりたいと考えています。

命を生み出す手伝いをするのが酪農、その命をいただくのが消費者。命の尊さが分かった時、生産者と消費者の間に「絆」が生まれるのだと思います。

私は牛乳が大好きです。私のような人がたくさん増えることを夢見て今日も1歩1歩未来に向かって前進していきます。